幹事を退任するにあたって

川島　隆義*

幹事に加えていただいたのが昭和６１年（1986）である。再々発足の時で幹事に推挙されていることを知らなかったが大谷政敬さんから「今、イタリヤ軒で再発足の会をしているがどうして来ないのか？」と言う問い合わせの電話があって幹事になった。

うろ覚えだが、当時の幹事には神田章、沼田誠、柿崎竹男、安藤廉、大西吉一、熊谷忍、外山正樹、古川昭夫、鈴木幸治、大谷政敬などの面々がおられた。幹事長には石橋輝樹さんがなられた。

会誌も昭和 53 年の 26・27 の合併号までで、会そのものも中断していた。合併号と国外の見学記は会の危険信号であると思った。

再々発足以降は例会と会誌の発行を年２回とし、これに見学会を１回行うことにした。会誌は今回で 54 号になる。先輩諸兄の実績が礎になっている。会の継続を心に堅く誓った訳ではないが、気負わず自然にやって来られた。これも熱心な幹事諸氏のお陰であり、「地質会館」が建設されたことも幸いであった。山岸さんや石橋さんが常に話をしていたように「我々は学者ではないのだから、日頃の仕事の問題やそれを解決したことなど自分の周りの事を発表の場として欲しい」ということも気楽にできたことの要因であるかもしれない。

始めのうちは幹事会を毎月のように開いていたが訓練？をつづけるうちにツーといえばカーで、意思の疎通ができ、要領良く品質を落とさないで例会や幹事会を行なえる様になった。これはコピー、フアックス、Ｅメール、パソコンなど事務用電子機器の普及のおかげである。これらは会を運営する上でおおいに役に立った。

会誌のサイズをＢ－５かＡ－４か、会の名称をどうするかなど基本的な話し合いも常にあってその都度かたくなにいまの形を守ってきた。これは会の歴史であり無くなられた先輩諸氏の遺言でもある。また山形の「山形応用地質研究会」石川の「北陸地盤研究会」など当会と同様の会も同じスタイルを採用されている。会の運営や基本事項を変えるには新潟・山形・石川の三者で討論する必要がありはしないか。

幹事もすこしづつ変わって私もついに古株になってしまった。若い人と変わるようにとの声は常にあったが、研究会が本当に軌道にのるまで頑ん張ろうと思っていた。時には酒を酌み交わし、おおいに語り、かつ歌った。いま思えば 14 年間のアッと言う間であった。

新しく佐藤成昭さんが幹事長になられ、若く優秀な新しい幹事も決まった。今後のことは何も心配していない。しかし、研究会は建設・環境・防災などの技術系を中心とした産官学に身を置いた人たちで運営されている。また、最も会員の多い産（業界）の経営が基礎になっている。業界各社の動向が今後の会の運営を左右するかもしれない。この会が少しでも業界各社の繁栄につながればと祈るばかりである。

「感謝　感謝」

---

* 株式会社新協地質